

2173再構築5

**ファンシター第02案
エリー**

序文

序文

母はわたしをハーミットと呼んだ。

隠者という意味であることを知らないまま、ただ、忙しい母が自分のために名前を考えてくれたことが嬉しくて、7歳になる年に端末を渡された時、迷わずハーミットをハンドルネームとして登録した。そしてわたしは「隠者のように人々から尊敬される人にならねばならない」という重荷を背負うことになる。

学者だった母の跡を継いで、人々の前で堂々と意見を言える人物になるために、母が最初にわたしに求めたことは、子育てロボットから言葉を教わること。

幼女だったわたしは、母の期待にこたえるために、文字を覚え、単語を覚え、意味を理解し、使い方を身につけた。

きっと褒めてくれるはず。そう期待して差し出された絵本を大きな声で、感情をこめて、リズムカルに読むと、母は、どういう話で、誰が何をして、どうなって、何を主張しているのか、と次々と聞き返してきた。予想外の問いに戸惑いながら、主人公が何をしていたのか思い出して、順を追って説明するわたしに対して、「明日もう一度」と言い残して母は去ってしまう。

それ以来、わたしの日課は記憶と分析。26歳になった今でも変わらない。

2000年代の子どもたちは、学校という場所に集められて、一斉に同じことを習っていたという。しかし、2500年の現代は違う。保護区と管理区と自由区という生き方の違う世界が共存している。

一般的に、生まれた子どもは6歳まで親元で育てられ、7歳から保護区の知り合いに預けるか、母親自身が保護区入るか、選択が迫られる。そして、13歳になる年に管理区の寮に入って、工場で働き、勉強することが求められる。15歳までの3年間を無事に勤めあげると、卒寮資格が与えられ、保護区に入ることが認められる。自由区に入るのに資格はいらない。しかし、保護区に戻ることは40歳までと決められている。

わたしの母は、自由区に住んで、管理区で研究をしていた。父が誰なのかは知らない。

保護区という自然の中で、興味を持ったことを教えていく、ゆったりとしたやり方に反発する人々は、昔からかなりいた。母もその一人。

7歳になっても、母はわたしを保護区に預けなかった。もちろん、自分が保護区に入ることもない。

自由区にあるマンションの一室で、母が手渡す本を読み、記憶し、分析し、批判することを続けた。

しかし、管理区で学者としてやっていくためには、卒寮の資格がどうしても必要になる。

13歳になる年、母と二人だけの空間から放り出されて、管理区の寮で生まれて初めて他人と接したわたしは、どうしていいのかわからず、母が望んだ堂々と意見を言う人とは真逆の、壁と同化する、消えた存在に成り下がった。しかし、悔しくも、悲しくも、辛くもない。当然という

気持ちで受け入れたことを覚えている。

求められるままにラインについて、石鹼を箱詰めする仕事を淡々とこなすだけの毎日は、意外なことに心地よいのだ。分析や批判で疲れた心が癒されていくのを感じる。

答えなど分からないことを求め続ける重荷から解放されて、積み上がっていく石鹼の箱という、事実に囲まれて、生まれた初めて感じた安らぎに満足して、強制される3ヶ月を過ぎても配置転換を求めず、そのまま3年続けた。

母は不満を漏らしたが、入寮した時点で半人前として扱われるので、親の支配が及ぶことはない。

平穏な日々の中で、一つだけ分からないことがある。ある少女がわたしに話しかけてくるので、知っていることを答えていたら、ある日いきなり「わたしは知識が聞きたいんじゃない。あなたの考えが聞きたいの！」と言い捨ててすたすた去り、二度と話しかけてこなくなったことだ。

悲しかったといより、どう違うのか聞けなかったことがとても残念だ。

すぐに一人になれてしまい、彼女の名前も覚えてないが、言い放たれた言葉は今もわたしの胸に深く打ち込まれている。

義務を終えると、エリートコースを歩むために、母が待つ自由区に戻り、卒寮の報酬として与えられた30万で、多くの卒寮者がそうするように、粗末なアパートを借りて一人暮らしを始めた。そして管理区のあらゆる選抜試験を受けたが、どこにも受からなかった。学者の道は閉ざされたといっている。

ルールから外れたわたしへの関心を失った母は、何も求めなくなる。互いに連絡をしなくなり、今日まで10年、母がどこで何をしているのか知らない。

工場勤務が気に入ったわたしは、自由区に住み、保護区の人々が使うものを作る、管理区の工場でサポート労働者として過ごしている。堅実な仕事なので報酬は安い、自由な時間が確保できるので満足だ。子どものころからしてきたように、本に囲まれた暮らしは幸福といっておかしくない。

わたしが特に興味を持ったのは、2100年代の暮らしだ。2500年を迎える現代のように、節制を忘れた保護区が、自由区に依存して、贅沢な暮らしをしているわけではない。自由区も起業精神を忘れた、何もしない多くの人々が、成功者に群がってくらしているわけではない。

黄金時代についてもっと知りたいと思っていたころ、いつも立ち寄る古書店の年老いた店主から、「自分はもう先が長くないから、大切にしてくれるならとおきをお託そう」と古い手紙の束を受け取ったのが、この手記を書き出した動機。誰に求められたわけでもないが、初めてわたし自身が書いてみたいと思い、自分から動き出したのだ。

手紙は全部、エリーという女性が、アツシという男性歌手に宛てたファンレターで、一通ずつ封筒にしまわれて、日付順に並べられている。

手紙の内容について触れる前に、わたしが知っている2100年代と現代の違いを書き出してみよう。

保護区の始まりは、都会に若者が集まり、老人だけになった田舎を再生させるためだったという説があるが、はっきりしたことはわかっていない。30人くらいの村が最小単位で、自治権

を持っていたことははっきりしている。

林業や農業など、基幹産業を持ち、村同士で物資を融通しあっていたため、数年なら保護区だけで暮らせる体制が確立されていたが、今は全く自立できていない。

かつては、自分たちが食べる分だけ野菜を作ったり、原生林を管理したり、12歳以下の子どもを育てたり、自立した老人を支援したり、「生物として必要なこと」を引き受けていた。一言で言えば、国の父母であり、聖なる存在だ。

「必要」を満たす保護区の人々に対して、「好き」を満たしていたのが、自由区の人々。彼らは、それぞれ自分が考えたことを自分で実現し、提供していた。冒険心が豊か。ネットを経由して世界に売り出せば、誰にでもチャンスがある夢のある時代。

それまでの「家族」という制度に支えられていた時代と違い、女は男に頼らなくても、子どもを独立させることができるようになり、男も妻子を養う義務から解放されて、本当に好きなことを選ぶ自由を得られた。また、多くの女性が子どもを産むようになったことで、女であっても子どもを産まないという選択が堂々と出来た時代でもある。

理想とされる黄金時代の保護区で何が行われていたのか？

今と何が違うのか？

わたしは、手紙の中に答えを求めてみようと思う。

以下は、わたしが手紙を一通ずつ読んで感想をまとめた記録だ。

2500年12月吉日 ハーミット